

# 商業の本質に就て

大 泉 行 雄

一、はしがき

二、商業なる概念

三、商業に於ける本質的なもの

四、商業本質論の輪廓

五、結 び

—

從來我が國に於て、通常「商事要項」又は「商業通論」の名を以て呼ばるゝものが、商事に關する各般の智識の雜然たる集合以上に出づることの尠さを遺憾と考へつゝあつた私は、他方、之等諸

商業の本質に就て

智識の集合に對峙して、商業本質論とも稱すべき統一的商業論の誕生を要望して止まなかつた。固より私と雖も、從來行はれ來りたる商業論を以て濫りに無用の長物なりと一蹴し、之に一顧の價値だに存せずと斷ずるの無謀を敢てするものではない。在來の「商事要項」又は「商業通論」は向後も永く存在し且つ存在理由を失はぬであらう。商事の實際又は實務が、商業従事者に之を要求することが、その有力なる原因である。此の意味に於て私は、商事に關する豊富なる諸智識の集合を目的とする通論を必ずしも無用とは考へぬ。唯我等の思惟はそれ以上に出でねばならぬと言ふのである。商業論は、商業を社會經濟現象の一部問として之を理解することにも等しく意を用ひねばならぬと言ふのである。而も此の事は獨り學者に向つてのみならず、商業實務家に向つても之を要求せんと欲する。蓋し商業の何たるかを正當に理解せずしては、正當なる商業の運営は不可能であり、而も正當なる商業の理解は、單なる商事智識の集合以上に出でねばならぬと信ずるからである。近年に至つて、商業現象を一個の社會現象として高き立場より觀察せんとし、或は商業の社會性に注目して、茲に商業の本質を改めて見直さんとする傾向の生じたことは、尠なからず年來の滿されざりし心を慰むるものがある。私は嘗つて、國民經濟雜誌の一端を借り、神戸商大、福田敬太郎氏の商本質觀と慶大、向井鹿松氏の商業論とを併せて紹論するの機會を得た（拙稿、商業の本質に關する最近の

二論、國民經濟雜誌四十七卷四號)。企圖せし所、一は以て商業本質論の新らしき立場に於ける之等二氏を借り來り、その所論を通じて多數者の注意を此の新氣運に喚起せんと欲したものであり、二は以て私見叱正の機縁を捕へんと願つたものに外ならぬ。その折、偶々觸れし福田氏説への私の評言に對し、氏は同誌一月號(四十八卷一號)に、「商をよび商業」と題する一論を寄せられて、私の省察の足らざる所を指摘せられ、氏の抱懷せらるゝ商および商業の意義に關する明確なる開陳を試みられて多大の示教を賜つた。恰も時を同じうして發表せられたる京大、谷口吉彦氏の論文「商業の本質と商業經濟學に就て」(經濟論叢、三十卷一號、本年一月)は、又我等の問題とするものを取扱はれ、商業の本質並びに其の研究方法に就て、氏の態度を示されたものである。

今、之等二氏の意味深き所論を讀み、その論ぜらるゝ所を對比すれば、我等は其處に著るしき差異を見出すに難くない。一例を擧ぐれば、谷口氏に在りては、商業活動を以て商品の賣買に外ならずとなし、今日の社會に於ける商業は賣買に伴ふ所の運送、分割、貯藏、金融等多くの活動をもなしつゝあるが、併し之等の諸活動は、商業の本質的活動をなすための附隨的活動に外ならずと解せらる。従つて「賣買を伴はざる運送、分割、貯藏、金融等は、單なる運送業、倉庫業、金融業等であつて商業ではない」との斷案が下されるのである(谷口氏、前掲論文 一九七頁—一九八頁)。然るに、福

田氏の論文に在りては「資金の貸借を主たる目的とするところの銀行、用役の授受を主たる目的とするところの運送業、倉庫業、あるひは旅宿業など、物品の賣買と用役の授受とを兼ねて主たる目的とするところの飲食店、危険の負擔を主たる目的とする保険業などは、いづれも取引を主たる目的とする企業である限り商業であると云はねばならぬ」と説かるゝ（福田氏、前掲論文五七頁）。

等しく商業と言ふも、二氏が商業と觀念する所のものは、實に斯くの如く異なるのである。通常一般に、何等の疑もなく理解しつゝありと信ずる商業觀念に就て、少しく省察を運らせば我等は忽ちに論議の錯綜を直視せねばならぬ。商業本質の把握が決して容易なる業にあらざること私は今更に痛感するものである。

私の此の一篇は、之等先輩の所説に對する考察批判を特に目的とするものではない。福田氏の懇篤なる叱正誘掖にも不拘、未だ充分に夫れを理解するに至らざること、固より筆者の資性不敏に基くものであるけれども、同時に又商業の本質を何處に求むるかの差異に因る所も少なからずと信ぜらるゝが故に、茲には比較的正確を期して自家の所信を披瀝せんと思ふのである。私は私の行論の途次、その所を得て之等二氏の見解にも二、三觸れたく思ふ。

私の観る所に依れば、本來、商業なる概念はそれ自體一つならず異なる意義を藏するものである。換言すれば、商業なる概念は、之を理解し論議する人の視角に應じて異なる意義を反映するのである。上述せる福田、谷口兩氏の所論の差異も亦その一例に外ならぬ。

何が商業であるかは、現實に商業と稱せらるゝものが何であるかてふ事實より觀察せねばならぬことであり、而して何が現實に商業と稱せらるゝかを吟味すれば、その場合我等の逢着する所は、實に商業概念の多義性である。從來の商業論に於て、商と商業とは區別せられず、混同せられたりとの攻難は、此の二者を峻別せんとする立場に據る限り妥當なものであらうけれども、此の混同は商と商業の區別を忘れたりと言はんよりは、事實一般に商業と稱せらるゝもの夫れ自體の中に多様なる部面を備へることに因ると私は思ふ。(註一、二)

註一、福田敬太郎氏は、前掲「商および商業」なる論文にて、私も亦通行の論説と共に商および商業を殆ど同意義に解し、もしくは混用せることを指摘し是正せられた。而して氏は、商とは個々の取引行爲を指稱し、商業とは此の取引行爲のための經營體を稱すべきもので、二者は嚴密に異なるものなることを説かれた。

私が商及び商業を同義に用ひた事は氏の批判の通りであり、その點に於て氏の嚴密なる區別は概念の正確を期する上より

意味深きものと思ふ。唯、商は取引行爲であり、商業は取引經營體なりとの解明に就ては、私は未だ充分なる理解に達し得ぬものであるが、やがて釋然たるの日に會はば、私は直ちに氏の說に參するを躊躇せぬであらう。

註二、福田氏が「商および商業」なる論文の標幟として掲げられたる商道九篇國字解中の商の釋義中「商の意義は商量裁度なり」との解説は、私には寧ろ氏の意味せらるゝ商業に一個よく相通ふと思ふ。「商業とは一個の經營體であつて、それによつて個々の取引行爲が計畫せられ、指揮せられ、實踐せられるものである」との氏の説明は、即ち商量裁度に外ならずと思はるのであるが、斯く觀るは失當であらうか。

斯くて、廣く商業と稱する場合にも、その何れの部面に觀點を置くやによつて必ずしも同じ理解は生じない。通常、商業を營むといふ場合には企業としての商業を意味する。然乍、我等は斯ゝる經營組織としての商業とは異なるものを、他の場合には等しく商業と稱するのである。一例を示せば、或る國、或る時代の商業政策と言ふ場合には、この商業は決して個々の經營組織を意味するものではない。個々の經營體が採る企畫方針は之を一般に商業政策とは言はぬ。即ち此の場合の商業は企業とは異なるもの、換言すれば經濟現象に於ける或る部面を意味するものなのである。

我々は又他の場合を考へて見やう。賣買を採つて觀るに、之が專問的に營業として經營せらるゝ時、疑もなく之を商業といふ。けれども、此の場合、單に賣買と云はるゝ事象よりして異なる對象

を捕へることが出来る。一は賣買を賣手及び買手の意識的活動として認識し、之等兩當事者を夫々行動の主體として觀察するものである。二は之等當事者の意識的活動の結果として出現する賣買現象そのものをば、當事者の意志より獨立したる社會經濟現象の一面として觀察するものである。前者は即ち商業經營の問題となり、後者は即ち商業の職能、地位の問題となる。

商業の經營と、その經營體相互の活動の間より浮び上る社會的現象としての商業とは右の如く之を分ちて考へられ、而して此のことが商業の意義を把握する上に困難を齎すのである。然れども、茲に注意すべきは、之等二個の觀察對象に就き、後者は前者を離れて存在し得ぬことである。詳言すれば、經營體個々の活動の間より出現すべき商業現象は、それ自體一個の獨立な對象として觀察し得るけれども、それは常に、個々の經營體、進んでは其の經營體の構成要素によつて色調を與へられ、制約せらるゝことである。此の點に於て私は、社會的現象としての商業本質の觀察に當り、獨り其の無意識的な浮び上りたる現象に止らず、商業經營體を組成すべき要素をも、此の角度より眺めんと欲するのである。換言すれば、通常商業の要素として、企業經營の觀點より觀察さるゝものが、經營を離れたる他の角度よりも之を觀察し得ると思ふのである。これに就ては後段再び觸れるの機會を有つてあらう(註)。

註、谷口吉彦氏は前掲論文中にて凡そ次の如く説かれる――

經濟事象（經濟事實）は二面より觀察せらるゝ。一は「單獨經濟の統一的意思の直接の結果たる經濟行爲又は經濟活動」であり、二は「是等の意思的活動の結果として無意識的に社會的に現はれ來る經濟現象」である。之等の二者は因果關係を有する。商業に就ても同様で、經濟活動中の商業活動と、經濟現象中の商業現象とが區別せらるゝのである。かくて氏は、前者を研究對象とするものを商業經營學、後者を研究對象とするものを商業經濟學と指稱せられる。而して商業經營學が對象とするものゝ本質は實質活動であり、それに設備、雇傭、組織、統制等の内部活動が附加せらるる。商業經濟學の對象は商品の社會的流通なりとせらるゝのである。

商業の右の如く二面より觀察せんとすることは私見と甚だ相近く、従つて商業現象を商業經濟學の對象とせらるゝことは私は賛意を表する。唯その商業經濟學が、進んで如何に建設せらるゝやに至れば或は見解の差異を生ずるやも計り難い。例へば本節末段に述べたる商業の要素の如きを商業經濟學の立場より取入れらるゝことに氏は一致せらるゝや否や不明だからである。

三

經濟史の教ゆる所に依れば、商業の最も原始的な形態として物々交換の行はれたることを示す。

やがて、經濟財の配給を専門的に行ふ商人の發生となり、貨幣が進化することによつて、此の配給現象は愈々複雑多様に展開せられて來た。かくて事實上、商業と稱せらるゝものが、それ自體多様

なる形態を示すに至つたのである。然乍ら、その複雑多様な形態にも不拘、或る事實が商業として認識せらるゝためには、必ずや其處に共通的な要素の存在することを知らねばならぬ。私にとつて商業の何たるかは、此の共通的なものを捕へて説明するの外途なしと思はれるのである(註)。

註、福田氏は前掲論文にて「商の意義の歴史性とは商と云ふ言葉に與へられたる意味の變遷を指すものであつて、換言すれば商概念の發展性を云ふ。ゆゑに商の意義の歴史性とは今私が商と云ふ言葉で捕捉しようとするもの、すなはち私に取つて商そのものが變化することを意味するものではない。商概念は發展して來たけれど、今私が商と云ふ言葉で捕捉しようとするものには變りはない。たとひ今後そのあるものが商と呼ばれなくなつても、もしくは商と云ふ言葉に他の意味が與へられるやうになつても、そのあるものはあり、もしくはあつたままである」(福田氏、商および商業、五二―五三頁)と云はれた。

氏の説明には私も一つの異議さへ有たない。全く之に承服する。私とても商業の發現形態及び内包の變化は之を認むるけれども、その中に在る共通的なるもの、即ち一貫的なもの——私はそれがある職能として理解する——は不易なものとして、茲に商業の本質を求めんと欲するのである。私の言葉が、商業の本質的職能それ自體までも變化して行くが如き印象を残したりとすれば、それは私の不文の致す所である。

商業の複雑多様な發展形態を歴史的に觀察する間より、そこに一貫的なものとして求めらるゝものは、私に依れば一つの機能に外ならぬ。商業が農業、工業と區別せらるゝ所以のものは、經濟財の配給職能に存すると觀らるゝのである。このことは福田氏の犀利なる批判にも不拘、現在の

私には無下に退くことの出来ぬものである。醫師の醫師たる所以は彼の行ふ治療なる機能にあると私は思ふ。假令、醫師にあらざる素人が、往々にして自ら治療を行ふことがあるとしても、治療を以て醫師の醫師たる所以を説くことには何等の支障もないのではあるまいか。

商業の本質を右の如く配給職能と解する時、この職能發現の最も根本的な従つて第一次的な形態は即ち賣買行程に外ならずと考へらるゝ(註)。

註、谷口氏は既に述べたる如く、商業活動の本質を商品の賣買に求めらる。而して運送、貯藏、金融等賣買以外の活動は、本質的なるものに對して附隨的なるものに過ぎずと説かるゝのである(谷口氏、前掲論文、一九七一—一九八頁)。賣買に重心を置かるゝ所は私見と相通ふものと思ふ。唯その他の活動との關係は、後段説くが如く、之を單に附隨的なものと思はざる。卑見とは徑庭あるが如く思はれる。

賣買行程の最も原始的な従つて最も單純な形態は一個の自然人によつて實行せらるゝ場合であり、今日多數に存在する個人商業—通常の小賣業—の如きは多分に此の色彩を具へる。而して、この賣買行程の人的要素たる個人經營者に就いて見るに、その初期に於ては、一切の行動に於て彼單獨の能力に限定せられねばならない。彼は其の準備的行程より、配給行程に至るまで、自らの資本を提供し、自らの勤勞を投じ、自ら貯藏、運送等を一切行はねばならぬ。然るに分業の發達、經濟

社會の擴大は、此の單獨主體に屬したる幾多の作用をば分化し特化するに至つた。即ち、嘗つては一個人に集中したりし各種作用が、貯藏、運送、保險、金融等と夫々專問的に之を分擔せらるることとなり、茲に各種の獨立なる企業が發達してきた。

茲に於てか今日の分化し複雑化したる配給行程は、之等の特化せる各經營體が、各々其の專問的職能を竭くす結果として實現せらるることになる。此の多様な特化的經營體が商品配給のために結合して織り出だす組織を名附けて、配給のための組織といふことが出来る（註一）。斯かる配給のための組織の運行により、その間に自ら出現する現象こそ、即ち商業現象であり、この現象の間に見出さるべき秩序は之を配給の組織と稱し得ると思ふのである（註二）。

註一、私は「商業の本質に關する最近の二論」中で、向井鹿松氏の配給組織體説を評して配給組織體の竭くす職能に重心を置くべきことを論じた。谷口氏も指摘せられる如く（同氏前掲論文、二〇四頁）、向井氏の組織體は經營體に外ならぬ如く考へらるゝが故に、私の所謂、配給のための組織とは異なる。配給組織體説に對する福田氏の批判は痛烈にして而も警拔、我等に深き省察を與ふるものがある（福田氏前掲論文、五〇頁）。

註二、商業の本質を配給職能（配給組織體にはあらず）に求むる企ては、福田氏の永遠なる攻難に値するものである。従つて氏の前掲論文は、この點に於て易らざる生命を有ち其の批判を續くる。

福田氏によれば、商そのものは易らざるものであり、而して商とは個々の取引行為と理解さるゝことも既に引證した。

商業の本質に就て

然らば取引行爲とは何ぞやと云へば、氏は之を説いて「取引とは對價の給付と反對給付である」と言はるゝ(前掲論文、五二頁)。

依つて之は商の本質であるが故に不易なるものであらねばならぬ。然れども斯くの如き取引の解釋は現存の經濟制度を前提としてのみ言ひ得るのであるまいか。例へば、共產制組織の下では、對價の給付と反對給付なる取引は行はれずして、それとは異なる原則——例へば生存權と云ふが如き——によつて配給の行はるべきことを想定し得る。かく觀ずれば、取引行爲を以てする商の本質も或る特定の社會制度を前提としてのみ言ひ得ることとなる。

若し又共產制の下では既に商は無しと言へば、「商を以て經濟生活の指導原理」なりとなす福田氏説に試みた私の嘗つての疑問は依然として残り改めて提出し得ると信ずる。即ち此の場合の指導原理とは特定社會組織の下に於てのみ言ひ得るので、それは寧ろ、經濟生活の指導原理てふ嚴肅なる名に價せざる底のものとなり終らざるかの疑問である(拙稿、商業の本質に關する最近の二編、一〇四頁—一〇五頁)。

#### 四

商業現象は經濟現象中、經濟財の配給機能を中心として出現する。この配給機能を捕へ、之を核心として尋究する所に商業の本質論が展開せらるゝと思ふ。即ち商業が社會的現象としての特性、機能、地位等之である。固より、此の機能に基く現象は、曩に叙べたる如く、單獨の經營體によつて、それ等相互の活動の間より出現するものであり、之を離れては全く出現し得ない。故に、配給

現象を出現すべき要素としての經營體は決して看過輕視し得るものではないのである。單獨經營體の研究は、今日經營經濟學の對象として取扱はるゝのが最近の傾向の如く思はれ且つ之は極めて重要なることであるが、それと共に、商業現象出現の一要素として經營體を觀ること、換言すれば單獨なる主體を單獨的にでなく、商業現象てふ全體に關聯せしめて考察することが等しく重要となるのである。

之と同様なる意味に於て私は、經營體中の諸要素に就ても亦異なる二面の觀察が行はるゝと思ふ。例へば、資本に就て云ふ時、一面には私經濟的立場より單獨經營の要素として之を論究し得る。簿記會計學的觀點に立つ資本論は大體此の部門に當ると言ひ得る。然乍、他面に於ては商業現象なる廣汎な觀點より、この資本をば異なる角度を以て眺めることが出来るのである。單獨なる經營體の一要素てふ地位を離れて、配給現象に於ける一要素としての商業資本なるものが即ち之である。斯かる場合には、一般に商業資本が他種の産業資本に對して示すべき特質、その作用等が重要な考察目的となるであらう。例へば、Hilferdingの金融資本論中に於ける商業資本の取扱ひ方の如きは、その當否は別として、私の茲に言はんとする配給現象一般より見たる商業資本の考察なりと思はれるのである。これは獨り資本に限らず、他の諸要素に就ても亦考へらるゝ所であり、商業

本質の理解には缺くべからざる重要性を有つと信ずるのである。

## 五

本論冒頭にて述べたる如く、此の一篇は福田敬太郎氏への答とはなり得るものではなく、氏の曩の批判は、この場合にも亦そのまま用ひ得るであらう。商は取引行爲なりとの金城に據らるゝ限り之に對立するものは當然その批判を免れ得ないからである。

此の一文は自家向後の精進のために、一應現在の所懐を福田氏並に谷口氏の所説に對比せしめたものに過ぎぬ。諸家の嚴正なる批判に俟つて啓蒙の近きを庶ふものである。